

パブリック・サービス研究分科会

講義年月日 2009年6月8日(月) 午後3時30分～5時00分

講演者 加藤好郎氏(慶応義塾大学湘南藤沢キャンパス事務長)

テーマ 大学図書館の環境整備: デジタルイミгранトからネイティブへ

講義内容

はじめに

現代は、23才以降が「デジタル・イミгранト」

23才未満が「デジタル・ネイティブ」と言われる時代である。

激変する時代の中で「変わっていくもの」と「変わらないもの」がある。

大学図書館の主たる利用者である「大学生」とは何者か?

「大学図書館」とは何が必要なのか?

□大学図書館の新しい環境とは

図書館の感性と理性の世界とは

- ・大学図書館の経営実態はそれぞれの図書館経験と合理的な思考の結果である。
- ・同時に、その時代、地域、環境、分野等あるいは図書館員、利用者、業者、学協会等の共同体としての結果でもある。

今後の大学図書館経営には

- ・大学図書館経営者達の感性の世界
- ・現場の図書館員個々の感性の世界
- ・学生個人とグループとしての学生集団の感性の世界

↓

ひとつの共同体として参画する組織構築が必要。

□建築家による3つのモデル

1. Issue-oriented Model 機能を重視するモデル
2. Solution-oriented Model 解決を重視するモデル
3. Search-oriented Model 調査を重視するモデル

乗り越えないと新しいものはできない

⇒どこに一番重視していくのがいいのか?

□H.リッテルによる建築設計における意地悪な質問

1. 終了規則を持たない。
2. 解について正しいか誤っているかはいえない。優れているか劣っているかがいえるに過ぎない。
3. 問題を解く手続きの完全リストはありえない。
4. 問題ついてはいくつもの説明が可能。
5. 問題も解も決定的な検証手段を持たない。
6. すべて一度きりのもので試行錯誤の余地はない。
7. すべての問題はユニークである。

新しい秩序⇒何でもありの時代⇒変わらないのは人間だけ
(人間は変わらない。人間が変えていく。)

□.大学における新しい環境の必要性

1.大学生の多様化

現代の学生像： ゆとり教育世代 ⇒ 自己実現欲求（成長欲求）不足
高校での未履修問題 ⇒ 基礎学力不足

2.企業社会が求める人材とは

自ら課題を発見し、考え、行動する人

得意な専門分野を持った人

動機付けがができる人（＝夢をもてる人）

・人並み以上の知性、体力、感受性、説得力等の能力、国益を与え

時代の先端を走り、世論を作り、社会をリードする人、さらに外国語が上手で、

外交感覚に優れ、対人サービスができる人、精神的な強さ（ストレスに負けない人）

国際社会で活躍できる人（国際人）

3.大学の役割

コミュニケーション能力（ネットワークを組める能力）を持った人材の育成

4.大学と現状と改善

中退率の増加防止、学力の低下⇒面倒見の良い指導

大学の中退率：私立大学 2.9%、国立大学 1.6%

AO入試・推薦入試：1997年 28%、2008年 49%

・育て直し、刹那主義、社会倫理性の欠如、主観的価値観

・躰の徹底、教養不足

・大学に自分の居場所が見出せない ⇒ 居場所としての「図書館」の可能性

・学生は授業後どこで何をしているのか

・学生のキャンパスにおける学習・研究の居住は

・学生のキャリア形成、能力スキルの習得

⇒未来創造塾：人間交際、全人的教育、生きる力、ピアラーニング

学習、教職員とともに行き、学び、究める場所

□大学図書館における学習と情報検索

探索型検索

3つのステップで成り立つ：

参照：事実検索、既知事項検索、ナビゲーション、トランザクション、照合、質問応答

学習：知識獲得、理解、解釈、比較、統合、集約、社会化

調査：拡張、分析、除外・否認、総合、評価、発見、計画・予測、転換

Marchionini, G.(2006) : Exploratory searching: From finding to understanding

□探索型検索プロセスにおける知識獲得パターン

知識獲得パターン

- ・対象領域に関する既往知識がない場合
 - 新知識獲得：それまで知らなかった知識を新たに獲得する
 - 概念の限定：探索対象が狭まる
 - 概念の関連付け：ある概念を別の概念に関連付ける
 - 詳細化：より詳細な知識を得ることで、対象概念の知識が深まる

- ・対象領域の知識をある程度知っている場合
 - 想起：既存知識を思い出す
 - 明確化：曖昧だった知識を明確化する
 - 訂正：誤解や誤った知識を訂正する
 - 変換：概念を別の枠組みで捉え直す
 - 検証：既存知識が正しいことを確認する

(Bates, M.(1989): The design of browsing and berrypicking techniques for the online search interface)

□大学図書館の情報検索環境

大学図書館の役割：大学全体の情報資源の管理・運用

⇒ いつでもどこからでも情報や教材にアクセスできる環境を構築する

- 1 機関リポジトリ
- 2 OCW 等の教材データベース
- 3 電子文書のアーカイブ
- 4 電子ポートフォリオ

電子図書館の役割：大学図書館における学内外情報の管理・運用

⇒ 電子情報を常に最適な状態にまとめ、いつでも元へ戻れる機能を構築する

- 1 学生の電子情報源へのアクセス
- 2 検索プロセス上での最適情報源の提供
- 3 更なる電子情報源への利用
- 4 情報検索過程の履歴の保存と記録

□電子情報資源と情報検索

1. 機関リポジトリ

1999年 Open Archives Initiative(OAJ)

2009年 機関リポジトリ数 1341(日本 72)、NII-JAIRO、DB

2. 電子ポートフォリオ (e Portfolio)

学習者の知的成果物 (レポート、プレゼンテーション、芸術作品等)

学習者の過去生産物の記録・保存・公開

知識構築の引き金 (トリガー)

・知的成果物→紙媒体、現物で収録→形成的な評価に利用

- ・形式的評価の電子化→ネットワーク化→画像、音声、テキスト、ビデオ
→メタデータ→マルチメディア対応

3. 英国における国家戦略

政府委員会報告書「デアリング報告」

- ・高等教育機関

学生成績証明書⇒プログレスファイル構築（自身の成長を振り返る手段）：高等教育質保証機構制定⇒（電子版）⇒ポートフォリオ

- ・学生の知的生産物登録⇒同級生、教職員、潜在的雇用主等に公開
- ・大学は各学生のポートフォリオを集合させデータベースを構築する

4. 大学図書館の学習支援の情報検索システム

- ・機関リポジトリ
- ・電子ポートフォリオ
- ・オンラインデータベース
- ・電子ジャーナル

□大学図書館の学習環境をデザインする

学習環境整備の4つの要素

1. 空間： 場所
2. 活動： 目的意識を持った学生およびその目的
必要なのは、利用者の動機付け
⇒ 何のために大学図書館を利用するのか？
3. 共同体： 支援する組織と人
支援するチームや共通認識を持った仲間
4. 人工物： それを行うための道具（= 現在は「電子化」）

□MIT Technology Enabled Active Learning(TEAL)

1 テクノロジーによる能動的学習

- 1 TAの役割
- 2 共同の学習方法
- 3 学生の授業の捉え方
- 4 教材と仕掛け
→コミュニケーションとチームワーク、ビジュアライゼーション

2 TEAL 型の学習環境デザイン

- 1 空間： 授業と教室のあり方を変える
- 2 活動： 学生の意欲、授業への関わり方を変える
- 3 共同体： TA等による支援と役割および授業の準備を変える
- 4 人工物： ビジュアル性に富んだ可視化された道具に変える

□図書館機能としてのcommonsとは

1 米国

個人主義＝能力主義⇒協調学習授業：チームの成果評価

図書館は、協調学習の場所とサービスの提供⇒学部と図書館の連携

2 ペンシルベニア大学のインフォメーション・commons

・ファミリーレストラン型の個別ブース：自由に飲食

・グループ学習室：ミーティング内容の画像化

・オンライン・レファレンス：ネット上でのスカラリー・commons

3 マサチューセッツ大学アーマスト校のラーニング・commons

・旧雑誌書架にラーニングcommons設置：大学院（SA）の学習支援

・キャリアセンター ライティングセンター：教員の指導

ファカルティセンター：教員の教育方法相談

ラーニングリソースセンター：教員の学習支援

□大学図書館を学生の学習の場所にするためには

学生を図書館に誘引するための9つのステップ

- 1 図書館の説明責任も含めて、利用者に図書館への注意を喚起させる。
- 2 自分がどこに属しているか、意識付けができる居場所を提供する。
- 3 将来自分に役立ち、必要と感じさせる。
- 4 学んでいることや興味があることに関連する仕掛けをつくる。
- 5 自信を持たせ、学習や研究に対する意欲を引き出す。
- 6 相談できる人がいて、また利用したいと感じさせる。
- 7 利用者が能動的か受動的にかかわりなく、満足感を感じさせる。
- 8 自ら話し、議論する場をつくる。
- 9 挑戦する学生を、評価してあげる。

このことで、大学図書館の学習支援が新たにクローズアップされる。

おわりに

- ・学生が授業後どこにいるか ⇒図書館にいる
- ・授業の合間、学生はどこにいるか ⇒図書館にいる
- ・他の学生と議論するためには ⇒図書館を使う
- ・何かを行動するためには ⇒図書館で戦略を組む
- ・学内で一番居心地のいい場所は ⇒図書館が最高
- ・友だちと協同学習するためには ⇒図書館でやろう
- ・友だちと駄弁するには ⇒図書館のcommonsで
- ・教員に学習の相談をするには ⇒ラーニング・commons
- ・教員に進路を相談するには ⇒インフォメーション・commons
- ・図書館員にレポートを相談するには ⇒ライティング・commons
- ・図書館長に諸々お話するには ⇒ぶらり案commons

これからの大学図書館を考える時、学内に居場所のない学生や問題を抱えている学生にとっても大学の中で最適な居場所となりうる可能性を持っていることを改めて認識したい。

今後の大学図書館運営には、「何のために大学図書館を利用するのか」という根源的な問いに応えるため、現代の学生個人及び集団としての多様なニーズを捉え各々の感性に響く場として機能する図書館サービス構築が全ての図書館関係者の感性と理性に求められているといえる。

以上